

和田央子さん講演会

福島イノベーション・コースト構想が進める惨事便乗型の軍事ビジネス
2024年5月12日(日)

開場:14時30分 開園:15時 参加費:800円

会場:社会福祉法人「ピースクラブ」4階ホール(@大阪市浪速区大国町1-11-1)



和田央子さん/撮影・土井敏邦

— 和田央子(なかこ)さんプロフィール —

「放射能ゴミ焼却を考えるふくしま連絡会」

東京生まれ。2001年、夫と田舎暮らしをめざして福島にIターン。2012年、8000ベクレル超の汚染稲わら焼却施設が自宅近くに建てられ、反対運動を行う。現在、福島県浪江町で進む「イノベーション・コースト構想」を監視する会として、現地で進行する惨事型の軍事ビジネスの監視活動を続けている。

これが復興の目玉？ 謎だらけの「福島国際研究機構」モデルは「核礼賛の地」、軍事転用可能な研究も

2023年3月11日 東京新聞 <https://www.tokyo-np.co.jp/article/235886>

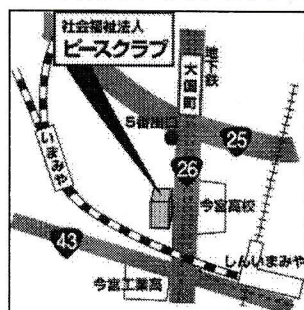
福島県内の住民グループ「放射能ゴミ焼却を考えるふくしま連絡会」の和田央子さんらは昨年10月、「福島イノベーション・コースト構想を監視する会」を結成。大学教授らを招いて月1回の勉強会を開き、その内容をインターネットで公開している。

和田さんは「原発事故というマイナスをプラスに変えようとしているのだろうが、負の側面を厚化粧して覆い隠そうとしている」と厳しい目を向ける。機構が司令塔として新産業を創出していく構想についても「原発で利益を出した企業が、また利益を出す構図になっていないか」と問題提起する。

監視する会は、機構の下で研究が進められる先端技術が軍事転用されることも危ぶんでいる。機構の重要分野「ロボット」には水素ドローンの開発も一例に挙げられている。

会の勉強会で講義をした東北大の井原聡名誉教授(科学技術史)は「福島の復興を語りながら、福島の生業の復興ではなく、外部からの新産業移植、国家的イノベーション都市建設のテストケースだ」とみる。「廃炉研究が第一のはずが、いろんな柱ができて影が薄くなってしまった。どこに力点があるのか。しかも、それに復興の予算を使うという。何重にも問題があると感じている」と機構の意義そのものを疑問視する。

機構は人材育成の場でもあることをうたうが、軍事転用可能な国家プロジェクトが研究内容になれば、特定秘密に指定される可能性もある。京都大の駒込武教授(教育史)は「研究者は公表する研究成果が業績となり、地位を築いていく。公にできない研究をしても機構の外で仕事はできない。若い研究者は集まらないのではないかと予測する。さらに、「研究というのは自由があってこそ成功する。内容は別にしても、国が期限や予算を決めた研究では、おそらくうまくいかないだろう」と付け加える。



主催 西成青い空カンパ

問合せ:Email:hanamama58@gmail.com Tel:090-7356-1747(オザキ)